

2022年12月17日

自然の農業

菊池達弥

令和4年の今年、宇都宮地方気象台によると10/24に初霜が観測されましたが、11月が終わっても露地の夏野菜が取れ続けました。11/6から11/18までエジプトで開催された気候変動に関する国際会議 COP27 では、改めて産業革命後の気温上昇を1.5°Cに抑える方針が固められましたが、国連環境計画が直前に発表した報告書では各国が掲げる目標を達成しても今世紀末には2.4~2.6°C上昇するとの指摘があります。誰もが直面せざるを得ないこの問題は、環境を考える機運の高まりとなっています。そこで農家の視点から環境負荷が少なく植物及び野菜が育つというのはどういったことなのかを考える機会とし、より自然というものに向きあっているように思える自然農法及び自然農のアイデアを知りたいと思います。

まず、自然という言葉には大きく2つの意味があります。一つは、ジネンと読まれてきた仏教に由来する古くから使われてきた言葉です。こちらは「おのずからそうなっている様」「天然のままで人為の加わらなさま」を意味します。もう一つ、西欧語のNATUREに由来する翻訳語としてのシゼンです。意味は「人工・人為になったものとしての文化に対し、人力によって変更・形成・規整されることなく、おのずからなる生成・展開によって成りいできた状態」です。普段我々は意識的に使い分けしていないと思いますが、それゆえのすれ違いにも考慮しつつ農業とのかかわりをみていきたいと思います。

まず自然を名乗る農業が登場したのは昭和初期（1930年代）に姿を現す岡田茂吉です。彼は後に世界救世教という宗教団体を創設する宗教家ですが、農業にも力を入れました。当初は化学肥料を使っていましたがその結果病害虫に悩まされ一切の肥料の使用をやめることとなりました。このことは西欧オーガニックの始まりと同じです。それを表す句として「いと浅き科学をもちいていと深き土の神秘を探る愚かさ」と詠んでいます。科学の力によって世界的に懸念されていた人口増加による食料不足も解消の目処が立ったころ、岡田は「食べものが沢山ありながら食べられるものがない」と嘆きます。作物の栽培については人為的な有機肥料は土地本来の力を弱めるとし無施肥栽培の有利性を説き、自然のあるがままを尊重して土を清浄にしておくことで、作物の生育は大自然の力（太陽、月、地球）によって生成されると説きました。彼の心配は、使用された化学物質の人体への摂取と継続的な投与による土地の弱体化です。また宗教的神秘感からも、土地には造物主がはじめから人が食べていけるに足るものを用意していると考えました。人を観察することによって、余計なものを取り入れないことが健康体をつくと結論づけています。

次に、著書の翻訳もあり世界的に知られるようになった福岡正信ですが、もともとは植

物病理の研究者でした。しかし自身が病気を経験したことで人生としての無に気づき、それを反映させたものが彼の自然農法でした。農業以前に、人の意図的な行為が生み出してきた現象への無常さ、とりあえず一旦すべてを手放してしまえという内観に至ります。近代農法から一つ一つ削っていき、何をやらなくてよいのかを突き詰めていったものでした。しかし「自然」と似た「放任」ではないことを強調し、そこには肥料がいらないような健全で肥沃な土づくりの必要性を説き、自然に土が肥える工夫、あらゆることが不要になるような条件を整える農法です。彼が考える自然農法の原則は①不耕起②無肥料③無農薬④無除草となります。これは人為による4原則ではなく、自然の力を生かし、その秩序に従ったものです。当初は、雑草にも困り米麦播種のまえに石炭窒素や除草剤をまくこともあったようです。また堆肥作りについては自身はやらないにしても特別否定はしていませんが、農家の負担になるような堆肥作りが推奨されてきたことには反対しています。果樹についても放任でなく自然型になるよう整枝など行い、場合によって最低限の農薬使用も許容しています。代表的な農法に、米麦連続不耕直播（別名：緑肥草生米麦混播栽培）というものがあります。稲があるうちにその上から麦をばらまいて、稲を収穫したときにできたわらを裁断せずにうえからふりまき、麦の収穫を迎える2週間前（5月初旬頃）に、同様に麦のうえから稲の種籾をばらまいて、刈り取った麦わらをその上にふりまいておくという方法です。そうして反10俵ないし良い時で12、13俵収穫していたそうです。更に省力したいなら、麦まきのときすでに籾もまいてしまうということです。この方法では緑肥としてのクローバーや鶏糞を使用し動物にまいた種を食べられないよう多少の耕起（溝作り）も行っていますので、原則にとらわれない柔軟な姿勢もみせています。自然農法は、いつの時代にも普遍的で、原点・源流というか、中心であり、常に一定で、不動・不変のものと言います。ただ、時代によってその見方が変わり、時に原始的・時代遅れとみなされ、最先端とひとが勝手に解釈していくものと捕えています。人間は自然を知ることはできない、自然を知っているのではないということを知ることが自然に接近する第一歩で、自然を知っていると思ったときには自然から遠ざかっている。稲の声を聞いたと思ったときには、自然から遠ざかっているのかもしれないと思え、とのこと。また、福岡本人、自然農法の「自然」という言葉を説明できないと言っています。しかし、その植物のあるべき「自然型」はわかったようです。近代農業、科学技術、ひいては西洋哲学を否定しています。栽培も公害問題も部分的に考えては解決せず、全部がひとつとならなければならない。局部的なもの見方でなく全体的なものにすべし。自然食というのはもともと最低の費用と労力でできるから一番安い価格で販売しなければならないという風にも考え、大衆性をもって、誰もが自然食品を食べるという運動をおこすためには安くしなければならないと説きます。しかし、お願いされて都内で販売したときには、自然食品というのが高いのが常識で高くなければ自然食品でないと言われ、見た目や腐りで苦情を受けたことがあるようです。原則、近い所で作り、売ること。自然を生かして、自然のめぐみを収穫する。西洋の近代農法は合成した野菜をつくる加工業者で、日本のこれまでの農業

は決して非能率ではない。とにかく地上に生まれ、生きているという現実を直視し、人間の原点は自然に随った生活で、何を食べなければ生きていけないなどと思うことは思い上がりだと。本人は無宗派ですが山小屋に書いた言葉、正食・正行・正覚を大切にし、一切無用、ガンジーの無手段の手段、達磨の無手勝法、無抵抗の農法、自然とは無分別の智による本能、直感である言います。最終目標は単に作物を作るだけじゃなく、人間完成のための農法と説きました。最後に、一楽氏が興した有機農業については、ただ単に有機物をやればよい、家畜を飼えばよい、農家と三位一体となったような農法が良いという程度なら、いつか科学的な次元の一農法にすぎなくなってしまうと懸念していました。

次に川口由一の自然農についてです。彼は、小学 6 年生の時に父を亡くし、青年期には芸術家になりたいと思い、農業が好きではありませんでしたが中学卒業後から農業を始めました。当初は化学肥料、農薬、除草剤、石油を多量に使っており、悪いとは思っても考えもしませんでした。両親祖父母の蓄えがあったので経済的に困ることはなかったと言います。38 才から漢方医学を独学で学び始め、最初の子が生まれた 40 才の頃に、それまで行っていた慣行農法から自然農法に切り替えました。自然農法にしてから収入がなくなり、最初の 3 年は大失敗、4 年目からお米がとれるようになり、10 年目には野菜も育つようになっていきます。老年期に至っても常に課題はあり、これまでもギリギリのところ、危険と隣り合わせでやってきたと言います。川口氏は、岡田・福岡両氏の自然農法とは違う自然農の具現化をめざしました。彼の考えの中心は「いのち」というものが完全絶妙なものであるということなのです。それを理解したいのちの道が自然の道であり、そのいのちの中にある自然な性質に応じ、添い、従うこと。そこに知恵でもって手を貸すことが自然農であるとしています。①耕さない②肥料・農薬を用いない③草や虫を敵としない、この三つを基本とし、他から持ち込まない、持ち出さないことも付け加えています。石油に依存せず道具を用いての手作業のあり方が地球上どこでも普遍的な農法として、その場その場の環境、気候風土、土地の状況に応じ、あるいは栽培する作物のいのちや性質に応じ、添い、従い、最後は任せます。その中で目的とする作物が育つよう適期に的確に必要な最小限度手を貸してやる栽培となります。手作業が最善で、石油を使つての機械化は実に不合理、不経済、非能率で、錯覚を起し、不幸に陥るとし、生きるに必要な最高の道具は肉体であると言います。その背景には資源の乱獲や環境汚染を杞憂しているのが見て取れます。この世界はすべてが完結しており一枚の田畑でも同様で、すべてが理由あることで共存共栄して生かされており、それが自然であると言います。ただし自然農は自然のままに何もしないのではなく、栽培しているという認識と作業は欠かせません。水田ではお米を、裏作に麦小麦を育てます。栽培しやすいよう畝を立てます。適期に的確に種をまきます。自然にこぼれたタネが自然に育つのを待つではありません。技術を習得し、知恵が身につくと誰でもできるようになります。何より大切なことは、いのちをよく観ていのちの世界を知る。知って、命ある人としての在り方を悟り、作物を育て実らせ、いのちを手にする方法技術を身につけることです。肥料は有機も非自然。自ずからもたらされるものに有機も

無機もなく、耕し、肥料を投入し、草を敵とするのは気が付きが十分でないということです。いのちの世界においては、水田でお米だけが生きているのは異常・異様な状態です。お米は夏の草で水を好むため、少し水の面倒をみて、草に負けぬよう少し手助けをします。科学、有機、微生物、EM、酵素農法等々、いずれも耕し、肥料を必要とし、草や虫を敵とします。マルチ、合鴨農法は、草が敵だとします。目的を達成するための必要な手助けとして、作物が特に若い頃は、草や虫にまけることがあるので、若い頃は草を抜き虫を捕殺します。それは生きるために栽培していることで必要不可欠なこと。環境の調和が乱れ、虫や菌の異常発生による被害のときは、生きるため、ためらわず、憎しみを持たないで、憐れみを抱かず殺す。何も思わずに作物を生かし、自分がいきること自らのところに立って殺す。自然界におけるいのちは、他を殺し絶妙にわが命を生きることが基本です。人という生き物は、他の命を殺して食べないと生きることができない定めでもあります。そのためには遅く生きる優れた精神と知恵と技術能力を必要とします。海外で、福岡さんの農法では上手くいかないかと相談されることがあるそうで、「福岡さんの型に定まった自然農法は、いのちある稲を野菜を果物を、あるいは気候風土を支配することになり、それぞれのいのちと自然界に添い応じることがないゆえに、それぞれの作物が育たないことになったとかがえられます。」と説明します。川口氏は自然農法の先人との違いは、自身がもとより専業農家であり作物の知識があったことを強みと考えているように思えました。また、漢方医学からも多くの影響を得ているものと思われれます。

今回は、3名の日本を代表する自然農法・自然農を実践する方を調べてみましたが、岡田氏に関しては本人の記述を参照できませんでしたので簡単な紹介になりましたが、あとの2名に関してはその代表的な一冊を読みました。そこで私が感じた共通点は、物事を相対的に見るのではなく絶対的・総体的にみているということです。両氏とも面白いことにアインシュタインの相対性理論を批判しています。つまりそれぞれの立場から相対的に物事を考えてはいけなしい言います。福岡氏は無常観を、川口氏は絶妙ないのちというものをもとに考えているように思われれます。また両氏は、人としての向上心が必要であり悟りの必要性を説きます。ここで立ち返って思うのが、最初の自然という言葉です。私には、福岡氏が使う自然は主に②の西欧由来の自然で、川口氏は主に①の仏教由来の自然であるように映ります。後でもう一度初めから読み直していただけたら幸いです。福岡氏は自然を観察対象と捕えています。もちろん川口氏も環境は観ていますが、自然という言葉の使われ方は主に「自ずから然らしむる」という意味合いです。私はずっと自然農法や自然農、さらには自然栽培のネーミングが悪いと思っていました。それはこの代表的農家の超自然的な思想と、自然という言葉の使い方が多重的で、さらに深掘すると東洋と西洋の思想の違いにまで及ぶのでは、と思ったからです。実は翻訳語としての自然が使われ始めたころからそのすれ違いはあり、「文学と自然」といいう論争のなかで評論家で女子教育家の巖本善治と森鷗外との自然の言葉の使い方が①と②ですれ違ったまま気づかれず使われているそうです。そうした言葉の専門家たちでさえそのような状況であれば素人にはなお

さらでしょう。文学で自然主義派と言われる田山花袋も本家であるフランスのエミール・ゾラの自然主義を勘違いしています。花袋は日常をありのままを描こうとしましたが、ゾラがしたかったことは人間の観察から見えてくるものです。わかりやすいところでネイチャーという科学雑誌がありますが、ここで発表されるのはありのままの研究ではなく、観察対象としての自然科学の研究です。農に戻ると、本来であれば自然に変わる言葉を提案できれば良いのですが、とりあえず私は有機農業の一バリエーションで良いのかと思います。そもそも有機という言葉は、日本有機農業研究会を創設した一楽照雄が、「天に気（機）有り」という中国の言葉から想起した言葉のため、化学の無機対義語とも違うので、これも自然と同じように混乱を招いてしまっているかもしれません。ただ、今後国が策定したみどりの食料システム戦略によって、いわゆる有機農業が市民権を獲得していくことと思いますが、既存の有機農業と有機 JAS しか勝たん農業は本質が違うと思いますので、国は有機という言葉の借用しないで、例えばグリーン農業みたいな安っぽい言葉を自分たちで考えればよいと思います。とはいえ、農業界は分断している余裕がないと思いますので、全体がより良い方向に行くことを願ってやみません。

【参考文献】

「翻訳語成立事情」柳父章（1982年4月）

「わら一本の革命」福岡正信（1983年5月）

「岡田茂吉 その豊かな世界－地上の天国と自然農法」大星光史著（医学博士）（2000年11月）

「自然農にいのち宿りて－目覚め・悟り・成長への道すじ」川口由一（2014年3月）